Interview

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

田中淳教授

命を救い、暮らしを守るために

2008年、情報学環総合防災情報研究センター(CIDIR)が設立されました。田中教授は、以来二年間センター長を務められています。「24時間、365日センター長です」と語り口は穏やかながら、予想される災害に備え、研究に真摯に取り組まれている田中教授のお話をお届けします。

■ まず、災害情報の研究に関心をもたれたきっかけを教えてください

中学高校時代、ミツバチのダンスの話や、それぞれの種における群れのルールなど、動物生態学に関心をもっていました。それが高校のとき、社会心理学で「同調」と呼ばれる、周囲の人たちと自分の行動との調整について書かれた新聞記事を読んだ影響もあり、同じ群れなら人間のほうが面白いと考えるようになったんです。その頃、東京大学に社会心理学科がちょうどできた。これがまた伊豆大島近海地震の余震情報で社会的な混乱が起こるなど、災害情報の役割が注目された時代でもありました。

一番大きな転機は阪神・淡路大震災ですね。それまでは、情報行動と災害情報を半々くらいだったのが、それからは災害情報に専念するようになりました。阪神・淡路大震災のとき、障害を持った方々、災害弱者の方々がどのような困難に直面したか、ということを当事者の方々にずっと聞きとりをしていました。災害弱者の方々の防災は、災害が社会に与える一番難しい課題だと思っています。この経験が災害を見直す一つのきっかけになりました。あれだけの悲劇をやはり無駄にしてはいけません。

■ CIDIRでの二年間の共同研究はいかがでしたか

CIDIRは、情報で人の命を救うことを目的として設立された組織で、地震研究所と生産技術研究所、情報学環の三者が連携する、きわめて学際的な組織でもあります。「学際」と言うのは簡単。しかし研究テーマや手法が違うなかで、実際に共同で研究を進めるのはそう簡単ではありません。例えば同じ災害というテーマを扱っていても、それぞれ時間や空間に対する感覚は異なります。火山の場合、長ければ一万年単位、河川の氾濫や堤防の建設であれば数十年単位で考えることになります。一方、日常生活において私たちは「来年のことを言えば鬼が笑う」という時間感覚ですし、住んでいる場所、働いている場所など"点"の情報にしか関心がない場合もありますので、なかなか一筋縄ではいきません。

しかし二年が過ぎてあらためて、理学と工学と情報行動論が一緒に研究することは実は非常に大事なことだなあと感じています。日々会話をしたり一緒に昼ご飯を食べたりコミュニケーションをするなかで、それぞれの考え方やお互いが求めていることを共有できるようになりました。そこから個別のトピックや、CIDIR全体のテーマが浮かび上がってきています。予想される首都直下地震にあたって、災害から一人でも多くの命を救い、暮らしを守ること。それにむけて何ができるか、議論を深めているところです。

■ これからの防災についてのご意見をお聞かせください

近年の災害で問題になっているのは、生活の再建です。阪神・淡路大震災の被災者の方が「死んでも地獄、生きるも地獄」とおっしゃっていたことが記憶に残っています。災害で亡くなることの不幸だけではなく、生き残って、一月、一年、十年、生活を立て直していく苦労は大変なものです。だから繰り返し、「命を守り、暮らしを守る」と言っているのは、生命を守るだけでなく、暮らしを守ることも含めて対策をたてること、家や生活の被害を抑えることが大切だということです。

家庭生活の維持だけでなく、民間ではBCP（ビジネス継続計画）が議論されてきています。大学でも研究・教育機能の維持が重要です。昨年から取り組んでいる課題のひとつです。

また災害情報にとって大きな問題は、災害それ自体の情報だけでなく、その情報を活かすためにどういう行動をとればよいのか、その具体的な情報をいかに提供するかということです。例えば、緊急地震速報が日本で導入されましたが、この速報が存在するだけでは役立ちません。具体的に私たちはどのように振る舞えばよいかが分かっていることが大事です。家の外に出るべきか、家のつくりによって対応は異なるのか、電車の中にいるときはどうするか、地域や地形による差は……、などと考えるととても難しい。本当に命を救うためには一般論は通じません。

近くで起きた地震の場合、緊急地震速報が出たとしても数秒くらいの時間しかないでしょう。しかし、その数秒の間のワンアクションによって、亡くなる可能性を減らしてケガで済むようにする、あるいは、ケガの可能性があったものを無傷で済ませるようにしたいと思っています。これからはヴァーチャル・リアリティーなどを含めた、利用者にとってより具体的で利便性の高い災害情報の見せ方が大切になると思います。この分野こそ、人の命を救い暮らしを守るために、情報学環の持つ様々な手法を活かす可能性がある領域ではないでしょうか。

防災は目標がはっきりしているだけに、社会に知見が定着しないかぎり、ただの知見の生産で終わってしまいます。技術を開発したり、情報を提供するだけではだめで、情報や技術の使い方、情報を受けとる側の研究、情報を利用していく側の社会的な仕組みを同時につくらなければならない、それが防災研究の宿命なのだと思います。全ての被害を防ぐことはできませんが、首都直下地震が起きた時に、その被害を最低半分にしないことには、CIDIRは負けたことになると思っています。

Topics

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

MELL EXPO 2010
祝祭的にネットワークづくり

3月5日～7日、MELL Platzが主催するシンポジウム「MELL EXPO 2010」が、福武ホールに延べ500名超の参加者を集めて成功裡に開催された。李鳳宇氏、小林弘人氏らを招いた5日のオープニング・セッション「日本型マスメディアの乗り超え方」からスタート。6日午後のセッションでは、学府OGらが進めるワークショップ「ローカルの不思議」をもとにした実践研究の思想と方法を鋭く問う議論が、飯田卓氏、山内祐平氏らを招いて展開された。メディア・リテラシー、メディア表現に実践的に関わる内外50のグループによる出店が、福武ホールのあちこちをにぎやかに埋め尽くす光景は、さながらエキスポそのもの。その全体像を動態的に可視化する「ネビュラ」システム（CRESTメディア・エクスプリモの成果）もデビュー。それを使った150名を超える総括ワークショップではこの領域の問題や状況認識を祝祭的に共有することができた。（教授・水越伸）

"IT WALL" あらわる

先の3月8日～12日の間、福武ホールの"考える壁"一面に電飾(写真参照)が出現した。関係者には"IT WALL"と呼ばれ、「IT」という文字の形状に並べられたＬＥＤのユニットが計264個配置されている。各ユニットはランダムに点滅し、昼間でも明るく光り、夜はいっそう輝いて、人目を集めていた。「アトリエオモヤ」のメディアアーティスト鈴木太朗氏の作品である。この試みは、同期間に本郷キャンパスにて開催された情報処理学会創立50周年記念大会を祝い、情報学環と情報理工学系研究科の有志により企画されたものである。両組織の創立10周年を祝うきっかけになればとの思いもある。

この情報処理学会大会は、本郷キャンパスの全体に及ぶような企画が行われ、受付した人だけでも例年の倍をはるかに超える7000名以上の参加者があったとのことである。なお、各参加者には、受付時に、情報学環と情報理工、情報の名のつく両組織の紹介となるフライヤーを配布資料に含めて手渡した。（教授・相澤清晴）

「OKIユビキタスサービス学」寄付講座シンポジウム

2010年1月21日に、小柴ホールにて「OKIユビキタスサービス学」寄付講座シンポジウムを開催した。このシンポジウムは、2007年4月に誕生した「OKIユビキタスサービス学」寄付講座における成果の発表と、今後のユビキタスサービス学の展望を議論する場として開催された。

ユビキタスサービス学とは、電子タグやセンサーネットワーク、モバイルコンピューティング、コンテキスト処理などのユビキタスコンピューティングやユビキタスネットワーク技術を活用した情報サービスを、技術シーズ（研究開発されている要素技術）からではなく、利用者のサービス的な視点から問い直そうとする試みである。特に日本が世界的にも技術的アドバンテージを持っているユビキタス分野において、技術指向だけでなく、サービス視点やビジネス的な視点を含めた研究を行ってきた。

こうした講座の趣旨に基づいて、最初に坂村健教授、並びに篠塚勝正氏（沖電気工業株式会社 取締役会長）から開会のあいさつがあった。その後、坂村教授の基調講演の中で、ユビキタスサービス学の定義や、これまでのユビキタスコンピューティング及びそのサービスの歴史や多くの事例が紹介され、そこから得られた多くの知見が紹介された。

本講座では、具体的なユビキタスコンピューティングのアーキテクチャとして、我々が推進するユビキタスIDアーキテクチャを実サービスに取り入れて、様々な分野で活発にユビキタスサービスを推進している４名の方々にご登壇いただき、各事例をご紹介いただいた。石川雄章特任教授（情報学環社会連携講座）からは社会インフラの高度化のためのユビキタス情報サービスが紹介され、齋藤正光氏（財団法人地域総合整備財団）からは、ふるさと財団がユビキタスIDアーキテクチャを用いて、既に数十もの市町村を巻き込んで実施している地域活性化のための事業、「ふるさと観光ユビキタス」のサービスが紹介された。坂下裕明氏（株式会社パスコ）からは、公物管理やインテリジェント基準点など、国土インフラの管理サービスの実用事例が報告され、般谷徹氏（田辺三菱製薬株式会社）からは、自社の医薬品にucodeを格納した電子タグを貼付けて実現した、医薬品トレーサビリティの実サービスをご紹介いただいた。また、事例紹介としては、本寄付講座のメンバーである、越塚登教授と下畑光夫研究員より寄付講座における活動事例が報告され、シンポジウムの最後には、これらのメンバーで、今後のユビキタスサービスに関するパネルディスカッションが実施され、閉会した。

本寄付講座は、３年間を予定しており、2009年度が最終年度の予定であったが、寄付講座設立当初の想定以上にユビキタスサービスが広がってきたため、更に１年間寄付講座が延長され、2011年3月まで継続されることとなった。今後の活動にご注目いただければ幸いである。(特任准教授・小林真輔)

Topics

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

着任教員自己紹介

池上高志　教授

理学博士(物理学、'89)。複雑系の科学を専門とし、特に生命以外の材料（コンピュータや化学反応やロボット）で生命をつくる、人工生命の研究に従事している。2005年よりはメディアアート系の制作も行い、山口のYCAMや東京のICCで作品をいくつか発表。そうした活動をまとめた著作として『複雑系の進化的シナリオ』（朝倉書店、1998）と『動きが生命をつくる』（青土社,2007）がある。

植田一博　教授

2000年4月から2004年3月までの4年間、流動教員としてお世話になりました。コース制を採用しているなど前回在籍したときとは情報学環のシステムも大きく変わっておりますので、初心に帰るような気持ちで研究教育に励みたいと思います。専門は認知科学、認知脳科学、知能情報学です。最近は特に、需要側のアイディアに端を発するイノベーションや日本伝統芸能における身体表現の特殊性に関する研究を中心に進めております。よろしくお願い致します。

目黒公郎　教授

専門は都市防災マネージメント、ハード対策とソフト対策の両面から、地震をはじめとするハザード（自然現象としての災害、外力）が私たちの社会に与える人的・物的被害、社会機能の低下などの様々な障害を最小化する戦略研究です。内外の30を越える災害と事故の現地調査、途上国の地震防災の立ち上げ運動にも参加しています。「現場を見る」「実践的な研究」「最重要課題からタックル」がモットーです。よろしくお願いいたします。

山本博文　教授

史料編纂所から異動してきた山本です。専門は日本近世史で、豊臣政権、江戸幕府初期の政治史研究が本来の専門ですが、近年は江戸時代全般を対象としています。元の職場では、細川家史料（熊本藩）、島津家文書（薩摩藩）などの編纂をしていました。取り扱う史料が、主に大名の書状や武士の日記なので、武士の実態や武士道論まで考察を広げています。情報学環では、歴史学と社会学の融合をはかるような研究を行いたいと思っています。

清水晶子　准教授

総合文化研究科超域文化科学専攻表象文化論コースからの流動教員です。専門はフェミニズム・クィア理論です。現在関心を持っているのは ①フェミニズム理論における他者性と再生産の形象、 ②性的マイノリティの政治におけるローカルとグローバルとのネゴシエーション、およびその両者に関連するものとして、③ 再生産管理に関する日本のフェミニズム言説と広範なクィアポリティクスの可能性の模索。よろしくお願いいたします。

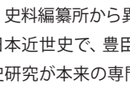
中野公彦　准教授

機械力学・制御工学を専門とし、主に自動車、鉄道等に関する研究を行っております。少々世間をお騒がせしていますが、現在の自動車などは多くの制御技術に支えられています。ただし、制御は人間を助けるものであり、より良い制御を行うためには、人間と機械の相互作用を考えなければなりません。様々な分野の専門家で構成されている情報学環は、このような研究を行う場としては最適と思っています。これからよろしくお願いいたします。

人事異動

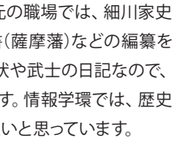
教員	採用	11/1	西　兼志　助教	4/1	金　成玟　助教	
		4/1	石井健太郎　助教			
	昇任	4/1	真鍋祐子　教授	4/16	開　一夫　教授（大学院総合文化研究科へ）	
	配置換（転入）	4/1	池上高志　教授（大学院総合文化研究科から）	4/1	清水晶子　准教授（総合文化研究科から）	
		4/1	目黒公郎　教授（生産技術研究所から）	4/1	中野公彦　准教授（生産技術研究所から）	
		4/1	山本博文　教授（史料編纂所から）	4/16	植田一博　教授（大学院総合文化研究科から）	
	配置換（転出）	3/31	鈴木高宏　准教授（生産技術研究所へ）	4/1	溝口　勝　教授（大学院農学生命科学研究科へ）	
		4/1	安達裕之　教授（総合文化研究科へ）	4/1	倉田博史　准教授（総合文化研究科へ）	
	定年退職	3/31	石上英一　教授			
	辞職	9/30	杉原周治　助教	3/31	加島　卓　助教	
	任期満了	10/31	大東　誠　助教	3/31	七丈直弘　准教授	
		10/31	辻本　篤　助教			
職員	昇任(転入)	4/1	野仲容子　総務係主任（本部総務・法務系から）			
	配置換（転出）	4/1	畑中賢治　総務係主任（柏地区事務部へ）			
	昇任	4/1	土井平安子　学務係主任	4/1	筒井昭子　図書係主任	
		4/1	島田淳子　図書係主任			

石上英一　教授



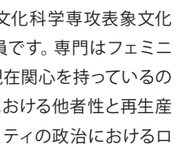
ご定年退職
おつかれさまでした

教育部研究生修了式



いつも福武ホールの共有スペース・コモンズを賑わせている情報学環・教育部研究生。その修了式が3月17日、本館2階教室で行われた。今年は15名の研究生が修了し、式のあとには同窓会総会・懇親パーティーなども企画され、修了生の新たな門出が祝福された。

修士・博士修了式



学際情報学府の修士課程、博士課程の修了式が3月24日、福武ラーニングシアターで開催され、修士82名と博士8名に証書が授与された。石田英敬学環長より修了証の重みと責任の自覚を呼びかける言葉が、佐倉統専攻長より新しい出発への励ましの言葉が贈られた。会場は論文の執筆を終えた修了生たちの晴れやかな表情に包まれていた。

News

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

優秀修士論文発表会

3月3日2009年度の優秀修士論文発表会が福武ホールにて開催され、優秀修士論文に選ばれた17名のうち16名による発表があった。それぞれ15分間の発表と5分間の質疑応答が行われ、その後の審査によって、総合分析情報学コースの佐々木健吾さんが論文「パケットキャッシュを用いたP2P冗長トラフィックの抑制手法」によって最優秀賞に選ばれ、表彰された。

加藤周一氏の 映画公開 記念シンポジウム開催

『しかし、それだけではない。加藤周一　幽霊と語る』の公開を記念したシンポジウムが２月20日、福武ホールで開催された。本シンポジウムは、本編でも取り上げられている加藤氏の講演会『老人と学生の未来――戦争か、平和か』（2006年12月）が駒場キャンパスで開かれるなど、東大が加藤氏とゆかりの深い場であることから企画された。本編の特別先行上映後、プロデューサーでもあり、生前の加藤氏をよく知る桜井均氏（元NHKプロデューサー）と石田英敬学環長との対談が行われ、加藤氏の晩年の足跡をたどりながら、近代日本における知識人のあり方が討議された。また、会場の参加者とも活発なやりとりが行われるなど、盛況のうちに幕を閉じた。(助教・西兼志)

「建築の際」第二期 始まる

情報学環・学際情報学府主催の建築系連続トークイベント「建築の際」第6回が2月22日に福武ラーニングシアターで開催された。昨年度の第1期・全5回に続く、第2期の初回である。本企画は、学際情報学府と工学系研究科の大学院生が、建築家×異分野の専門家×情報学環教員のゲストの選定から、事前取材、プログラム作成、当日の司会、建築雑誌におけるレポート執筆に至るまでを務めるボトムアップ型の企画である。

第6回「生命の際」は、建築家の伊東豊雄氏、分子生物学者の福岡伸一氏、佐倉統教授をお招きした。現代において「生命」というコンセプトがいかに建築と結びつくのか、その可能性と問題点について刺激的で活発な「対話」がなされた。(助教・南後由和)

学府学生も参加 若手社会学者合同ワークショップ

本学・東洋文化研究所と台湾・中央研究院が交換協定を締結したことを記念し、2月22日と23日、若手社会学者合同ワークショップ（IOC-IASA Joint Workshop for Young Sociologists）が台湾で開かれた。日本からは10名が参加、うち２名は学際情報学府アジア情報社会コース修士課程の学生、１名は文化人間情報学コース博士後期課程の学生だった。

学府が提出し、日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」（2010年度）に採択された『アジア・グローバリゼーション・スタディズ』若手研究者育成プログラム」では今後3年間、海外の研究機関との共同作業を通じて若手研究者の海外渡航を支援してゆく予定であり、今回の合同ワークショップは、そのキックオフ的役割も果たした。（教授・園田茂人）

岩波映画を通して 昭和30年代の女性運動を考える

3月14日福武ラーニングシアターにて、記録映画アーカイブ・プロジェクト第3回ワークショップ「おかあさんの民主主義―岩波映画に見る昭和30年代のくらし―」が開催された。昭和30年代の女性運動を岩波映画を通して考えていく本ワークショップ。まず『村の婦人学級』(1957)と『町の政治―べんきょうするお母さん―』(1957)が上映され、上映後それぞれの監督である羽田澄子氏と時枝俊江氏から当時の撮影秘話が語られた。その後、パネリストとして斉藤綾子・明治学院大学教授から劇映画における母の表象に関する報告、吉見俊哉教授からは婦人学級の歴史的背景に関する報告があり、最後は登壇者全員での討論を行った。会場からは、戦後の主婦や婦人のあり方が深く理解できたという声や、羽田氏と時枝氏が同席したことの貴重さを喜ぶ声もあり、ワークショップは大盛況のうちに幕を閉じた。（丹羽研M2・松山秀明）

メディア学フロンティア・芽の会

メディア学フロンティア、通称「芽の会」は、学際情報学府博士課程院生の有志が主催する公開研究会として、昨年の11月から隔月開催している。「芽の会」という名前には、研究者としての「芽」のほかに、メディアの「メ」、メディア・スタディーズの新たな可能性への思いがこめられている。そうした意味で、この研究会は学内外のさまざまな方とともに、議論を拡げてゆくアリーナにしたいと考えている。すでに3回実施したが、学環のほかにも人文社会系、総合文化、教育学など学内他部局の院生のほか、毎回さまざまな他大学の院生、出版社の方に参加いただいている。次回開催は5月の予定。詳細はホームページをご覧ください。
http://www28.atwiki.jp/menokai/
（吉見研D４・柴野京子）

受賞報告

●第25回電気通信普及財団賞
唯野隆一・山崎俊彦・相澤清晴 の論文“スケルトンを用いたTime-Varying Meshからの動き抽出と類似動作検索”（映像情報メディア学会誌vol. 62 no.5 2008）がテレコムシステム技術賞を受賞。3月15日、メルパルク東京にて表彰された。
●1-click Award 2009
佐々木遊太（教育部研究生・2年）がインタラクティブアニメーション『友達』において、㈱リクルートメディアコミュニケーションズ・㈱リクルート・ガーディアン・ガーデン共催1-click Award 2009インタラクティブ部門にて優秀賞を受賞。(1月15日公開審査会)
●ANIFEST2010
同じく佐々木遊太がアニメーションPV『東京のフォホー』において、チェコの国際アニメーション映画祭（International Festival of Animated Films）ANIFEST2010 VIDEO CLIP 部門に入選。(2月13日発表)

『東京のフォホー』より

Book

『ラディカル構成主義』

エルンスト・フォン・グレーザーズフェルド 著　西垣通 監修
橋本渉 訳 / NTT出版 2010年2月

ラディカル構成主義は、ヴィーコ哲学やピアジェの発生的認識論、そしてサイバネティクス思想を基礎として展開された、構成主義思想の新たな潮流である。本書は、オートポイエーシス論と強い親近性をもった新たな認識論を開拓し、近年脚光を浴びているエルンスト・フォン・グレーザーズフェルドの主著の邦訳である。

『自由への問い　第4巻　コミュニケーション』

林香里、北田暁大ほか 著
北田暁大 編 / 岩波書店 2010年2月

「より公正で平等な自由はいかにして可能か」を問うシリーズの第4巻。コミュニケーションと自由をめぐるアクチュアルな問題を理論的・歴史的に問いなおす。表現・言論の自由などの古典的な問題系から、近年のコミュニケーション環境の変化にともなう自由の位置の変化までの検討を通じ、「自由な情報空間とは何か」を探る。

編集後記

今号からニューズレターのデザインが一新されました。福武ホールの「考える壁」をイメージしたシンプルかつ大胆な表紙です。学環は今年で設立10年、ニューズレターも次号で30号という節目を迎えます。一人でも多くの方が手にとって、学環のプロジェクトに関心をもっていただけるよう、今年度も編集作業を進めて参りたいと思います。（R）

編集委員
柳原 大・林 香里・前波奈保子・大久保 遼
東京大学大学院情報学環・学際情報学府
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
news@iii.u-tokyo.ac.jp

学環学府 29 05. 2010

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo
編集委員 ： 柳原 大・林 香里・前波奈保子・大久保 遼 mail : news@iii.u-tokyo.ac.jp http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/